

Title	東アフリカ農耕民社会に関する社会人類学的研究： 独立後の社会変化と農耕民の対応
Sub Title	
Author	坂本, 邦彦(Sakamoto, Kunihiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1999
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.50 (1999. ), p.61- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000050-0061">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000050-0061</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

献史料と民俗調査を組合せ、多くの論文を渉猟した上で、各地の伝承に対して明確な方法論による鋭い分析がなされ、従来にない考察が多数提示されたことである。第二には地方修験という視角によって、白山信仰を中核に立山や石動山など北陸地方の修験と、吉野・熊野を主体とする中央部の修験とが極めて効果的に対比されて、相互の特色と関係性、地域の独自性や歴史的展開の差が浮かび上がったことが挙げられる。第三には地方修験の存在形態を序論で三点に集約して明示したことにより、全国各地の地方霊山についての従来の調査や研究を再検討して統一的に検討する方法論的根拠が与えられたことである。複雑で個性のある地域をこれほどまでに一貫性を以って解明した論文はこれまでになかった。本論文は基本的には宗教民俗学的研究であるが、社会学・人類学・芸能史・国文学・歴史学・地理学など学際的に大きく寄与し、日本の宗教文化の解明に大きな貢献をしたと考えられる。

本論文は各所で述べたように独創性が極めて高いが、それゆえに今後の緻密な論証や史料の読み込みを待って解明できると思われる点も多々見受けられる。歴史学との本格的な接合は今後の課題であるし、民俗学の講集団研究などとの関連はあえて触れられなかったが、地域社会との関わりで言えば、やはり組み込む必要性があったと思われる。更に、大きな課題は既成の仏教教団との関連である。例えば、白山や石動山の修験と曹洞宗の関連については、詳細に考察が加えられているが、筆者自身も述べているようにまだ不十分である。また、北陸地方の信仰を検討するには広い地域にわたって強い信仰を民衆に浸透させた浄土真宗教団と修験道の関連が明確になっていない。真宗はいわゆる毛坊主に基礎を置いており、半僧半俗の修験と極めて近い性格を持つ。また、高野聖や不受不施派は念仏を中核として民衆の中に入り込み、大黒札や六字称明札を配札したし、善光寺聖など真言念仏との交渉もあった。こうした地域の民衆の歴史と既成の仏教教団との交流など知識の質の異なる人々との交渉過程が多元的に描かれれば、更に論文に重厚さが増したであろう。また、地方修験の解明にあたって、宗教的空間認知の解明が試みられて、かなりの成果が挙げられているが、地図の作図に際して縮尺の記載がないためにやや正確さにかける点があることは難点と言えるかもしれない。但し、これは瑕瑾に過ぎず論文全体の大きな流れにはさほどの影響はない。以上のように、幾つかの今後の課題は残されているものの本論文の学界への大きな寄与は疑う余地はない。

上記の審査の結果により、筆者は本論文によって博士(社会学)の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士(平成11年7月14日)

乙 第3293号 坂本 邦彦

東アフリカ農耕民社会に関する社会人類学的研究  
——独立後の社会変化と農耕民の対応——

(論文審査担当者)

主査 國學院大学文学部教授・  
慶應義塾大学名誉教授

文学博士

宮家 準

副査 敬愛大学国際学部教授・  
慶應義塾大学名誉教授

法学博士

小田 英郎

副査 名古屋大学大学院文学研究科教授  
社会学博士

和崎 春日

副査 慶應義塾大学文学部教授・  
大学院社会学研究科委員

文学博士

鈴木 正崇

### 論文審査の要旨

本論文は、ケニアのタイタ Taita とタンザニアのパレ Pare という二つの山地農耕民社会や文化の動態を、1979年以來の長期にわたるフィールドワークで収集した膨大な一次資料に基づいて、社会人類学的視点から研究したものである。東アフリカの農耕民社会は、ヨーロッパ社会との遭遇以後、西欧列強による長い植民地支配の時代、1960年代を中心とする独立期、国民国家の形成期という大きな変化の時代を経てきた。本論文は、アフリカの文化的枠組みとは異なる国民国家の枠組みを受け入れた第3期に焦点をあてて、農耕民が国家形成期において生態的・社会的・文化的危機に直面した時に、様々な対応方法を模索してきた過程を検討して、東アフリカ農耕民社会の可塑性を描き出している。更に、その可塑性が社会のどの部分に顕著であり如何なる特性を持つかを分析し、農耕民が選択する生き方は、伝統性の喪失ではなく、社会構造全体に組み込まれた再生産のメカニズムによって新たな状況を生成していくことであると。一方、大きな視野にたつて本論文を評価すれば、従来の部族や民族を単位とするアフリカ研究に対して、

本論文はタイタとパレという二つの民族を同時に視野に入れ、両者を比較しつつ、歴史的緊密性、生態系や世界観の類似などを考慮して、一つの地域単位として設定し得るという仮説を提示する。最後には、アフリカを対象とした地域研究を越えて、より広い視野で人類学という学問が何をなすのかという未来に向けての大きな提言を行なっている。

本論文の特色は現地語を十分に習得して自ら収集した緻密な資料に基づいた考察にある。その成果は論文の付録の緻密な語彙集にも表れている。良質な資料を提示している点から、本論文の信頼度は極めて高く、学界への大きな寄与と評価出来る。筆者は日本人ではただ一人のタイタとパレの研究者で、特にパレについては海外の研究でも蓄積は薄く貴重な成果であると言える。論文の一部は既に英文で発表されて高い評価を得ているが、今後は全貌を英文で明らかにして、国際的な評価を受けることが期待される。

全体は3部12章からなり、それに序章と終章が加わる。第1部ではタイタ社会、第2部ではパレ社会の民族誌記述を中心とし、第3部において、両社会をひとつの地域単位として捉え、様々な変化への農耕民の対応が議論されている。内容は以下の通りである。

#### 序章—課題と方法

##### 第1部 タイタ農耕民の世界

###### 第1章 タイタの生態系と民族

###### 第2章 タイタの社会構成

###### 第3章 タイタの儀礼と世界観

##### 第2部 パレ農耕民の世界

###### 第4章 パレの生態系と民族

###### 第5章 パレの社会構成

###### 第6章 パレの世界観

##### 第3部 東アフリカ農耕民社会における社会変化の諸相と農耕民の対応

###### 第7章 社会的対応：危機を生き抜く場

###### 第8章 経済的対応：活性化するローカル・マーケット

###### 第9章 宗教的対応：社会変化と宗教

###### 第10章 文化的対応：農牧システムと空間認識

###### 第11章 言語的対応：ことばと文化の近縁性

###### 第12章 東アフリカ農耕民社会の可塑性

#### 終章—地域研究としてのアフリカ研究

#### 付録 Taita Research Data/Pare Research Data

#### タイタ語基礎語彙集/パレ語基礎語彙集

序章は本論文の課題とその展開を述べる。東アフリカ社会の農耕民は、様々な社会的・文化的な変化を経験し危機に対応してきた。具体的に見ると、農業経営では混栽のような危機分散方式への転換、都市への出稼ぎなどがあるが、現在では更にローカル・マーケットや故郷指向型の小規模工業、物々交換の現代的展開が見られるという。こうした状況を伝統の近代へ置換や、伝統性の一方的喪失とせず、農耕民社会の自律的選択や新たな生成の諸相と見て、主体的対応のメカニズムを明らかにしていくことを課題とするという。基本的な視座をこのように設定した後に、タイタとパレに関連する先行研究を、民族誌の検討や社会人類学・歴史学・農業経済学などの業績を通じて概観する。理論的には、米山俊直の提示した人間の生存と実存のレベルを基底にして、生態系・社会系・文化系という3つのシステムが構成され、経済・技術を前二者間に、言語・象徴・記号を後二者間に設定するという枠組みが検討され、比較研究の指針として取り込むことが述べられる。序章の最後では、フィールドワークについての全日程と調査内容が明記されて研究方法が明示され、資料の信頼性を高めている。

第1部「タイタ農耕民の世界」では、タイタ社会の民族誌を描き出し本論文の意図に関わる部分を重点的に記述して、社会変化に対応する状況を明らかにしている。

第1章は、生態系、民族、言語を記述し概観する。彼らの生活領域は、平地のサバンナ帯から2000メートルを越える山地帯まで広範囲にわたり、高度差を利用した生活を営んでいる。この変化に富む生態系が、彼らの世界観を知るうえで重要な手掛かりを与えるという。次いで地勢・気候・植生について述べ、農耕民の生活の基礎を明らかにする。民族については、人口と民族の構成を1989年の国勢調査の資料から明らかにして、民族間関係や歴史的関係を分析する。言語に関しては、最も使用者の多い丘陵地帯の人々のダヴィダ語 *kidawida* を主体に、方言として使用されるサガラ語 *kisagalla* とカシガウ語 *kikasigau* との関係を述べている。以上の諸点は、社会構成を理解する前提となるという。

第2章は、社会構成について親族組織と村落共同体、土地保有制度を中心に述べている。3世代の深度をもつ父系の出自集団（キニョンバ、*kinyumba*）が親族組織の基本で、これを基盤に小リネージ（キチュク・キティニ、*kichuku kitini*）が形成されて外婚単位となる。7～8世代にわたる大リネージ（キチュク・キバー、*kichuku kibaa*）は相互扶助組織として機能するという。最大規模の親族集団はイザンガ *izanga* で地域的・政治

的単位である。父系出自集団を基盤として成立していた社会は、イザンガ外部からの移住者増加に伴って、新しい政治単位を設ける必要が生じ、他の民族も包摂する形で村（ムジ, muzi）が作られていった。こうした動きが土地保有に対する認識を大きく変えていく。つまり、土地統合化政策が進められ、従来の共同体による土地保有制度が変革されて、入会地や儀礼の場としての洞窟などが政府の管理下に置かれると共に、各プロットごとの所有者の確定や土地登記が行なわれて、人々の生活を揺さ振ることになったという。

第3章は、儀礼と世界観について考察している。その主な内容は、通過儀礼、結婚、宗教、呪術、伝統医療、数文化複合の検討である。最初に、儀礼全般について概観した後、特に結婚に関する儀礼をとりあげ、婚姻圏、結婚の形態、婚資の内容と支払形態、結婚観の変遷などについてフィールドワークによる資料を提示する。今日では駆け落ち婚が主流になり、その理由は簡単に費用が安い点に求められるという。次に、宗教と呪術を通じての世界観の検討を行なっている。宗教の中心は祖先崇拝にあり、儀礼の場としては、頭蓋骨を納めた洞窟と呪薬を埋めた森が重要視されてきた。儀礼を主宰する宗教的指導者はムラグイ mlagui と呼ばれている。大きな変化は、19世紀末からのキリスト教の布教活動によって生じ、世界観の在り方やムラグイの役割に大きな影響を与えていく。更に、第2章で考察した社会変化は、儀礼の場の洞窟や森を奪っていくことになった。一方、彼らを取り巻く呪術的世界は、人々の心の中に共有され、ムサーウィ msawi と呼ばれる邪術を行使する者がいる。呪術は語りを通じてその存在を社会に示すという観点から、体験談、呪薬の使用法、邪術師の行為、呪術をめぐる裁判などの語りを通じて、その認識とその変化を検討している。また、ムラグイは狭義には伝統的宗教の指導者で、呪医として位置づけられるが、広義には伝統的宗教とは直接的な関係を持たずに病気治療のみを行なう人を含めて用いられる。この二種のムラグイの儀礼や人生史を通じて、伝統的宗教と病気治療との関係やその変容についても検討されている。本章の最後では、タイタと周囲の民族集団との関係の付け方や、相互に社会集団をどのように認識していったかを検討する。その場合に、タイタ固有の数を冠した集団構成原理の構造を取り上げている。1から10までの数を象徴的に用いて集団を表わすミタロ（数）は、政治、経済、社会、文化、宗教などに関わる数文化複合（ミタロ・コンプレックス, Mitalo Complex）として捉えることが可能だという。

ミタロの表記・内容、その構造と意味を、彼らが語ったテキストを通して明らかにして、集団の関係性、集団の相互認識を考察している。

第2部「パレ農耕民の世界」では、パレ社会の民族誌を描き出し本論文の意図にかかわる部分を重点的に記述して、社会変化に対応する状況を明らかにしている。

第4章は、生態系、民族、言語を記述し概観する。パレの居住地は、山塊によって南北に大きく二つに分れるが、本論文は主に北パレを対象にして考察する。最初に、地勢、気候、植性について述べ、基本的にはタイタの居住地と類似した景観を持つと指摘する。次に1988年の人口調査の資料をもとに、調査地の人口と民族構成について検討している。歴史に関しては植民地時代の史料と口頭伝承に基づいて再構成を試みて、北パレと南パレの関係を明らかにしている。言語に関しては、パレ語は言語学上はタイタ系の言語と同じ集団に属するが、了解可能という点では、タイタに隣接した民族であるタヴェタが用いているタヴェタ語 kitaveta が一番近い関係にあるという。また、パレは元はアス Asu が自称だが、次第にパレと呼ばれるようになった経緯を明らかにしている。

第5章は、社会構成についての考察で、農村開発と故郷志向型企業、定期市と物々交換、漁村の形成に関して検討している。現在では、3つの大きな変化が生じているという。第一は、労働移動で、タンザニア全体の動きを検討し、都市での人口吸収力が限界に達して後に、パレが選択した故郷志向型企業の実態を述べている。第二に、市場での交換形態の観察とマーケット・マミーの聞きを通じてローカル・マーケットの社会に及ぼす活性化の様相を明らかにしている。特に、交換形態に関して、魚を交換財とする物々交換が隆盛を示す現状を通じて、農耕民の変化への対応を述べている。第三は、パレ山地の西側にダム湖が出来て新たに漁村が誕生し、これまでは居住地ではなかった平地がパレの生活圏の中に入ってきたことである。湖で獲れる魚は燻製にされ、社会全体に大規模に流通し、文化や社会に大きな変化を齎らした。こうした大きな変動の中で、パレが何をどのように選択したかが検討されている。

第6章は、パレの世界観について、通過儀礼、宗教、空間認識をとりあげて検討している。彼らは伝統的には祖先崇拝を中核にして、タイタと同様に、祖先の頭蓋骨を墓から摘出し、それを宗教儀礼の場である洞窟に納めてきた。その中心となるのは、神の家（ニウンバ・ヤ・ムング, nyumba ya mungu）と呼ばれる場所で、神の住む洞窟があった。しかし、ここはダム湖の建設により

水没することになる。その時のバレの人々の対応は現実的で、水没した儀礼の場所を望む湖岸に標識を埋め込み、そこを新たに儀礼の場とした。その標識は、新たに形成された集団の表象となったのであり、従来から「神の家」の儀礼に関わってきたワルト・クラン Waruto clan に属する人々が儀礼を続行している。しかし、こうしたダム湖の出現や漁村の形成は、人々の空間認識に大きな影響を与えた。バレの人々は、山こそ人間の住むべき重要な場所であるとの意識が強く、乾燥が進み赤茶けた平地はマサイが牛を追うほかには利用する術がない。平地は非日常的な場とされ、儀礼の場であった。しかし、こうした山と平地に関する意識は、ダム湖の登場や漁村の形成で、多民族共生社会が出現したことにより、従来の認識枠組みの変更を迫られているという。

第3部「東アフリカ農耕民社会における社会変化の諸相と農耕民の対応」では、第1部と第2部を踏まえ、タイタとバレを一つの地域単位として捉えて、東アフリカ農耕民社会の社会変化の諸相とそれへの対応について考察している。

第7章は、変化への社会的対応を検討する。移住の展開によって生じた、山と平地の中間領域の発展と多民族共生社会の形成を主題としている。その原因は、人口圧への対応、飢饉時の避難行動、土地統合政策に伴うものがあり、初めは農村の内部での施策が採られる。しかし、外に向けて新たな場を作り出す方向性もあり、それが労働移動、つまり広義の移住である。その内容は担い手が集団か個人か、動機が内因か外因かにより異なる。大きな動きとして、山と平地の中間領域に位置する場や、土地利用が進められなかった平地など周辺の世界が積極的に開発され、一部に多民族共生の場も生み出しているという。都市への出稼ぎは労働の飽和状態を齎らしたために、移住は周辺部に集中してそこでの活性化を生み出し、再び山の中に住む人々に還元される。そこには農耕民内部に受け入れる基盤としての多様性や、再生産のメカニズムの流れがあるという。

第8章は、変化への経済的対応を検討する。北バレで独自の発展を遂げたローカル・マーケットの実態とその活性化が齎らした経済効果が検討されている。ここは、日用必需品を買い求める場である一方、自家製農作物を売って現金収入を得ることができる場でもある。人々はこちらでは僅かな販売税を支払えば商売が出来る。近年の現象としては、農作物に限定せずに他のローカル・マーケットや卸問屋で仕入れたものを売るマーケット・マミーといわれる女性の急増がある。彼女は、普段は農耕

民として畑を耕しているが、市の日には交易人として活躍する。同郷出身者・親族・近隣居住者で小集団をつくり、一緒に行動する傾向があるという。近年、貨幣を媒介とする交換とは別に、物々交換が燻製魚を中心として盛んに行なわれ始めた。この近代的な物々交換の担い手の大半も女性である。魚が新たな交換財として登場してきた背景には、ダム湖の建設による淡水魚の繁殖の成功があるという。これは外因的要素の影響による変化である。従来は農村-都市の関係による出稼ぎについては広く論じられてきたが、ここでは農村-漁村の関係の中で市場の交換概念が変化した様相が明らかにされている。

第9章は、変化への宗教的対応を検討する。主題はアフリカの思考体系とキリスト教とイスラーム教の相互関係の中で社会の変化と宗教の変化を探ることにある。最初に、アフリカの人々が宗教的世界をどのように把握してきたかを、地元の人々による思考の体系化の試みを通じて検討する。キリスト教の影響が加わることで、こうした思考やいわゆる伝統との葛藤が生じ、その中での農耕民の対応が検討されている。一方、国家形成に伴って、開発が進み、伝統宗教の祭場は土地統合化政策やダムの建設など近代化の名のもとで様々な変化を強いられてきた。特に、森と洞窟を儀礼の場とする祖先崇拜が大きな影響を受けて、死についての考え方を変容させたという。キリスト教と共にイスラーム教も徐々に浸透して、人々の道徳や倫理を変え、宗教的世界観全体の再編成を迫るようになってきた。タイタに比べてバレの方がイスラーム教の浸透が強い。しかし、伝統的宗教の一定部分、特に病氣治療や占いなどは、確実に継承されている。総体的に、個人の宗教性よりも、地域社会の宗教性に注目すれば、根強い伝統の持続が見られると示唆している。

第10章は、変化への文化的対応を検討する。様々な社会変化が、農牧システムと空間認識にどのような影響を齎らしたかが検討されている。農作物、農業技術、灌漑、牧畜などの生業基盤が考察される。次いで空間認識の検討に入り、山と平地という認識の対立構造が、中間領域の活性化で変化を起こすが、それは単純な三極化ではなく、平地部分と中間領域が次第にパレ化される過程の中に、山と平地に対する認識を再編成する方向性を読み取ることが出来るという。また、山こそ人間の住む場であるという認識が、タイタとバレに共通して見られる。これは伝統的には、降水量、土壌などの生態系で山が有利であるだけでなく、牧畜民や外敵からの隔離された場であるという面もあったからである。山と平地の差異化は、日常的には価値の低い平地を儀礼の時に逆転さ

せ、平地には山に住む人々を守護する神が住むという考え方もある。開発や移住が進むにつれて、平地自体の物理的な変化が起こるが、儀礼は継承されて精神世界の持続力の強さが再認識されるという。

第11章は、変化への言語的対応を検討する。多言語社会であるアフリカの中で、地域のリングフランカがどのように選り取られていくかが考察され、言語の近縁性という観点から言語と文化の類似性を指標とする地域設定が検討される。調査地においては、タヴェタ語地域の多言語状況が述べられ、他方でタイタ語とスワヒリ語、タイタ語とパレ語の近縁性が指摘される。そして、多言語的状況の中で、リングフランカとしてのスワヒリ語が人々のコミュニケーションに果たしてきた役割が検討される。言語をめぐる様々な状況を考察した後、最終的には、採録した語彙の対照を通してタイタ語とパレ語の近縁関係が重視され、タイタとパレを一つの地域単位として捉えることが提案される。

第12章は、以上検討してきた第11章までの議論を踏まえて、生態的側面・社会的側面・文化的側面に分けてこれまでの記述を整理する。そこに一貫しているのは、内因的或いは外因的変化に対処してきた東アフリカ農耕民社会の可塑性で、危機への対応はその場限りではなく、全体が一つの再生産メカニズムを構成することを明らかにしている。

終章は、以上3部にわたる議論を経て、一挙に巨視的な観点を導入し、アフリカを対象とした人類学的研究が今後向かうべき方向性を示し、地域研究としてのアフリカ研究の課題を考える。最初に従来の「地域」概念を検討し、地域研究の問題と方法について、「世界単位」論、アフリカの「単位」、地域社会論的アプローチの3つの学説を検討する。細かな地域の民族誌の描き方については従来も議論されてきたが、大きな地域研究としてのアフリカを視野に入れた場合、何を地域単位として設定し、どのように記述するかについては結論が出ていないという。民族誌研究と地域研究は、発生と展開の過程はやや異なるが共に人類学研究の基本的課題である異文化理解に関わるはずである。筆者はこうした課題に対して、異なる民族であるタイタとパレを歴史的な緊密性、生態系や世界観の類似を考慮して、一つの地域単位として捉えて、様々な変化への対応を比較の視野を入れて考察することを提案する。これによって相互の文化や社会の理解をより深め得ると考えたのである。更に、将来はこの立場を一般化し、他の社会にも敷衍できるような理論的枠組みの構築を考えていると結論付ける。

以上が本論であるが、付録としてフィールドワークによる一次資料の基礎データ（タイタのシングルルル地区個人データ、北パレのローカル・マーケット個人データ、パレのムワンガのキオスク、パレのキティ・チャ・ムング村個人データ、インフォーマント・リスト）、及び、タイタ語の基礎語彙集（2000語）とパレ語の基礎語彙集（500語）を添付する。これは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の「アジア・アフリカ言語調査票」に基づいて採録したものである。以上が、本論文の概要である。

本論文は東アフリカのタイタとパレという二つの農耕民社会での長期にわたる現地調査に基づいた詳細で厚重的な民族誌を基礎として、多様な変化に注目して考察を加え、動的に描き出した点が高く評価される。従来の社会人類学の研究は、特定地域の個々の事例に関して周到な考察は行なうものの、フィールドワークによって得られた資料の選択にやや偏りがあり、過去の伝統の再構成や解釈に傾いて地域や民族を静的・完結的に描く傾向が強かった。これに対して本論文は、世界全体が緊密に連関して加速度的に変化している現代社会において、社会人類学が何をなし得るのかを問いつつ、徹底して変化に焦点を据えて資料の収集と分析を行なっていることが特色である。評価すべき点を整理すると以下になる。①急激な時代と社会の変化への対応を生態的・社会的・文化的という多様な側面から、現地の一次資料をもとに分析し把握しようとした試みで社会変動研究として優れた業績である。②従来の社会人類学者が捉われがちであった、特定の民族の研究、「民族単位の社会」の研究から外に踏み出して、タイタとパレという二つの民族の居住空間を「一つの地域」として研究対象とする点に斬新さがあり、民族誌と地域研究を繋ぐ研究の端緒となる。こうした領域を国家誌（小川了）という名称で意図的に構築することも可能であろう。③民族誌の研究に国家や資本の問題を入れ込もうという野心的試みであり、世界経済システム論をフィールドで検討したとも言える。④全体として、社会人類学や文化人類学と他の人文社会科学との接点を意図し、真の意味での学際的研究や地域研究に展開する可能性を秘めた開かれた研究として評価出来る。

但し、本論文には残された課題もある。第一には、本論文の背景をなす時代は国民国家形成期にあたるが、タイタとパレは各々がケニアとタンザニアという別の国家に所属している。相互の国家形成の方式には明確な違いがあり、同じ農耕民で地域空間を共有していると言って

も、相互の対応には差異が生まれるはずだが、この点がやや不明確である。具体的にはタンザニアでは、農業共同化と自力更正を目的としたウジャマー政策が展開しており、パレの居住地では行なわれなかったとしても、その影響は皆無と言えるかどうか検討すべきであろう。但し、筆者も国家形成によって新たに生じた行政区分の中で伝統的社会構造が変質することは示唆している。第二には、地域研究には社会人類学や文化人類学の主張する area studies, つまり特定地域で長期間調査を行ない事実を集積する過程で問題を発見し理論化するという立場と、政治学などで主張する或る理論や法則を特定地域で検証するという立場がある。筆者は「地域理解のためには法則定立的な態度で望む」と述べて後者の立場に立つが、実質的な方法としては前者に近く整合的ではない。しかし、狭義の地域研究と広い枠組みの地域研究の接合については多くの研究者が模索中であり望蜀の感と言うべきかもしれない。この点については、緻密なフィールドワークによる大量で厚みのある資料によって、地域という概念を実証的に明らかにしようとした筆者の意図を高く評価したい。

上記の審査の結果により、筆者は本論文によって博士(社会学)の学位を受けるに値するものと認められる。

心理学博士(平成12年2月26日)

乙 第3339号 望月 昭

聴覚障害と知的障害を併せ持つ個人における機能的言語行動の獲得：条件性弁別訓練による非音声モードを使用した教育的アプローチ

[論文審査担当者]

主査	帝京大学文学部教授・ 慶應義塾大学名誉教授 文学博士	佐藤 方哉
副査	慶應義塾大学文学部教授・ 大学院社会学研究科委員 教育学修士	富安 芳和
副査	慶應義塾大学文学部教授・ 大学院社会学研究科委員 文学博士	坂上 貴之
副査	吉備国際大学社会福祉学部教授・ 筑波大学名誉教授 教育学博士	小林 重雄

## 論文審査の要旨

望月 昭君提出の学位請求論文『聴覚障害と知的障害を併せ持つ個人における機能的言語行動の獲得：条件性弁別訓練による非音声モードを使用した教育的アプローチ』は、著者が、愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所において、聴覚障害と知的障害を併せ持つ4名を対象者に、条件性弁別課題(恣意的見本合せ)を中心的な手法とする刺激等価性パラダイムが機能的言語行動の教授方法としてどのように貢献できるかを検討した、15年間にわたる研究をまとめた労作である。本論文は、第I部序論、第II部実験、第III部全体考察の3部から構成されている。

第I部序論は、第II部で報告される応用的実験研究がどのような問題意識に基づいてなされたものであるかについて述べられたものである。

著者の問題意識は、以下の通りである。

Sidman (1971) に始まる条件性弁別課題を中心的な手法とする刺激等価性に関する研究は、障害を持つ個人を対象とするものであっても、大部分は基礎的なものであって、応用可能性に焦点を当てているものはきわめて乏しい。しかし、刺激等価性パラダイムの障害を持つ個人の言語行動の学習や訓練への応用可能性がきわめて大きなものであることは、従来の研究からも明白である。例えば、1) 対象者のリスナー行動を中心としたアセスメント手段としての有効性、2) 「転移」を前提とした刺激クラス形成における学習の節約性、3) 言語理解の耐久性への貢献の可能性、4) 障害を持つ個人によくみられる、2つの刺激セット間の関係学習が困難な場合の迂回的な学習方法としての有効性、などである。

刺激等価性パラダイムは、特に、聴覚障害と知的障害を併せ持つ個人に対して、相互に等価な複数の表現モードを使用するトータル・コミュニケーションを獲得させる上で有効な方法となるものと思われるが、行動分析学的研究を中心に過去の研究を展望してみると、このような見地からの組織的な実践的応用研究はこれまで皆無であるといつてよい。

したがって、刺激等価性パラダイムによる、聴覚障害と知的障害を併せ持つ個人を対象者とした、以下のような目的のもとでの組織的な研究がなされねばならない。

- 1) 音声による言語行動が不可能と思われる個人に対して複数の非音声的言語行動を獲得させること。
- 2) リスナー行動を中心としてきた刺激等価性の手続